

アベリスツイス高校生派遣事業

与謝野町・アベリスツイスの交流の歴史を感じて

2012年アベリスツイス訪問団引率者
井上公章（与謝野町農林課 主任）

1. はじめに

1984年（昭和59年）から始まったアベリスツイスとの交流事業ですが、私が初めて高校生派遣事業と関わりをもったのは19年前の1993年（平成5年）からです。当時高校2年生であった私は旧加悦町が公募した派遣事業に応募し、アベリスツイス派遣第1期生として貴重な（体験を）経験をさせていただきました。この交流を通して、私は与謝野町の戦争の歴史を知り、また、皮肉にも戦争がきっかけでこの平和交流は生まれ、育まれてきたことを知りました。また初めての海外経験となったこの交流では、アベリスツイスのホストファミリーに親切にいただいたこと、地球のはるかかなたに友人を持てたこと、そして何より、フランク エバンツ氏とも対面することができたことなど、私にとってそれらの経験は大変すばらしいものでありました。

私はこのような貴重な体験を後輩達に経験して欲しいとの思いから、社会に出た後、与謝野・アベリスツイス友好協会に入りました。隔年来町する高校生や随行者の受け入れを協会員としてフォローするなど、与謝野町とアベリスツイスの交流がますます発展することを願いながら、心の中ではまたアベリスツイスに行ってみたいと思っておりました。

平成24年8月に本事業の随員職員希望調査があったときには、農林課職員の皆さんに仕事などで迷惑をかけると思いながらも上司と相談し、引率者として派遣事業に携わることができました。

2. 研修会

派遣事業に参加する高校生6名と通訳が決定して一緒に研修に臨むことになりました。今回は、私を除く全員が女性という派遣団でありました。

派遣事業の研修会は、アベリスツイスとの交流目的などの知識を学ぶという内容で、事前に5回、事後に1回の計6回の研修を行いました。事前研修の前半は、海外へ行くことの注意点から研修先であるアベリスツイスやウェールズについて。研修中盤は、大江山運動公園内の慰霊碑見学などの現地研修やこの交流に至った経過などを中心に行いました。特に、故フランク エバンツ氏が体験された大江山ニッケル鉱山や捕虜収容所での捕虜労働体験と戦後に起こった数々の偶然、偶然が引き合わせたさまざまな方々との交流から再び旧加悦町に来訪された経過など、その後のアベリスツイスと与謝野町との交流の歴史を学びました。そして研修の後半は、ホームステイの心得と歓迎会の余興の練習を行い、事前研修は終了となりました。事前研修は充実した内容であり、現地での交流の中で大いに生かされたのではないかと感じています。

3 出国

11月3日(土)

午後5時、野田川庁舎前にて、太田町長、アベリスツイス友好協会の糸井定次会長から激励の言葉をいただき、関係者などに見送られて午後5時30分に与謝野町を出発しました。12日間に渡るアベリスツイス高校生派遣事業が始まりました。



4 アベリスツイスでの交流

11月4日(日)

ドバイを経由して現地時間の午後0時頃、予定どおりのフライトでバーミンガム国際空港に到着。入国手続きを済ませると、現地の係員が出口で迎えてくれました。空港からアベリスツイスへは鉄道を利用していくため、バーミンガム国際空港に隣接しているバーミンガム国際空港駅に係員の案内によりモノレールで移動しました。イギリスを含めた海外の鉄道は、時刻どおりに発着しないこともあり、列車が入ってくるホームは直前にならないと分からないらしく、待合室で待つことにしました。その待ち時間にメールを確認すると(主な公共施設内のネット環境は整備済みであり大変便利な世の中になっていることを改めて実感)、企画財政課から「アベリスツイスの2駅前のマカントリッヒ(Machynlleth)駅で高校生を1人下車させて欲しい」と連絡が入っていました。私は最終確認を現地協会のキャロライン氏と電話で最終確認をしなければなりませんでした。

キャロライン氏との慣れない英語で調整をし終わるちょうどその頃、列車がホームへ入って来ました。ここで現地の係員と別れ、アベリスツイスへ向かいました。マカントリッヒ(Machynlleth)駅で高校生を1人下車させる不安はあるものの、車窓からはイギリスを感じさせる羊の放牧風景が一面に広がり、徐々に近づくアベリスツイスへの期待を膨らませるものでした。

バーミンガム空港駅を出発して約2時間半後、マカントリッヒ(Machynlleth)駅に到着しました。ホームには協会のキャロライン氏とジェイク氏がホストファミリーと一緒に待っていてくれており、安心して高校生1名をホストファミリーと対面させることができました。その後、キャロライン氏とジェイク氏も列車に乗り込み、一緒にアベリスツイス駅に向かいました。なお、キャロライン氏とジェイク氏は、2005年(平成17)年に与謝野町に訪れた際、協会員として個人的に交流しており、再会を懐かしむことができました。

すでに真っ暗となった午後5時30分頃、アベリスツイス駅に列車は到着。ホームではアウエル会長・ケレディグ議員などの役員とホストファミリーが出迎えてくれました。高校生がホストファミリーに紹介されると、高校生はそれぞれのホストファミリーと一緒にホストファミリー宅へ行き派遣事業がスタートしました。

引率者の私と通訳の岡部氏は、アウエル会長宅に招待いただき、晩御飯をご馳走になり

ながら明日からのスケジュールを確認しました。私はこのプログラムで交流が進み、派遣事業が成功することを改めて望んだ初日の夜となりました。



(アベリスツイス駅)

1 1月5日（月） 天候：晴

滞在期間中唯一快晴となった一日でした。アウエル氏が私たちの滞在しているホテルに迎えに来てくださり、町の概要を紹介していただき、その後スクールに移動しました。

高校生は、ホストファミリーの高校生が通っているスクールと一緒に登校していました。2名がペンウェデグスクール、4名がペングレイススクールです。イギリスと日本とはそもそも教育システムが違いますが、アベリスツイスには日本の高校生と同世代が通うスクールが2校あり、ウェールズ語を教えるペンウェディグスクールと英語を教えるペングレイススクールがあります。語学から教育方針が違って、希望によりどちらの学校でも選択して通えるとのことでした。

高校生6名は、言葉が通じない上、慣れない環境の中でなんとか馴染もうと挑戦していました。幸運にもペングレイススクールには日本人留学生が1名在籍されていて、通訳などをお世話になっていたようです。



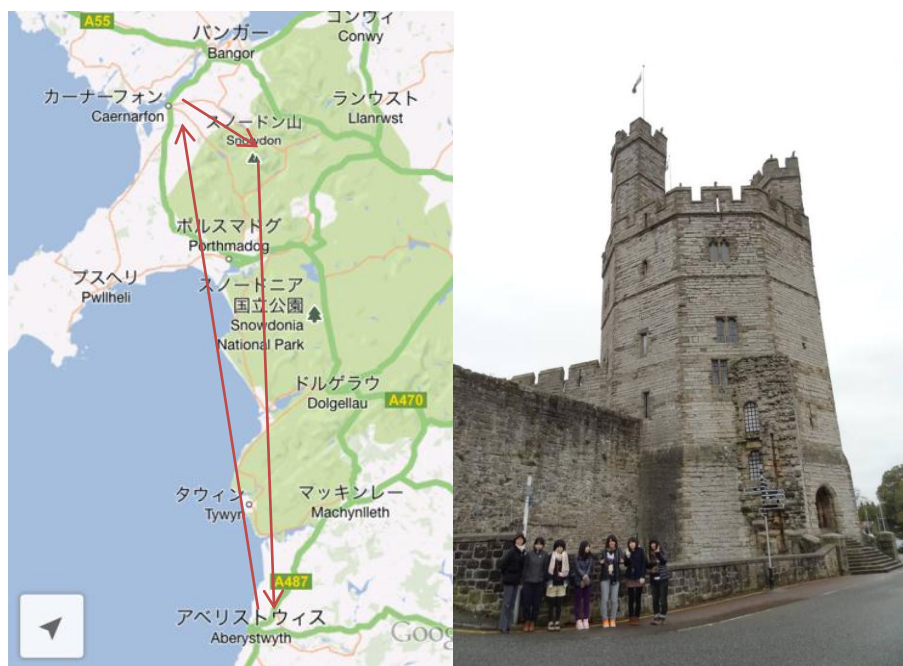
(ペングレイススクール)



(ペンウェデグスクール)

1 1月6日（火） 天候：雨

アウエル氏によるミニバスの運転で、北ウェールズを訪問。北ウェールズは、スノードニア国立公園地内にあり、絶景を臨めると期待して訪問しましたが、あいにくの雨模様によりその壮大な景色を見ることができず残念でした。しかし、カーナフォン城やウェールズで一番高い山「スノードン山」に連れて行っていただきました。アウエル氏には、アベリスツイスからカーナフォンまでの約4時間往復8時間程度を運転していただき感謝でいっぱいです。



(カーナフォン城)

その夜は、1993年（平成5）に私がアベリストウィスに訪問した時に一緒に交流したレドウィン氏と会う約束をしていました。彼は私の滞在しているホテルまで迎えに来てくれ、私たちは17年ぶりの再会を果たし、懐かしい思い出話に花を咲かせたり、近況を報告し合うなど会話が弾みました。彼はアベリストウィスの隣村に住んでおり、現在県庁で働いているとのことでした。



(1993年の訪問時)

(1994年の受入時)

11月7日（水） 天候：曇のち雨

ペングレススクールの教職員の朝礼で今回の派遣事業について紹介をしていただいた後に、2006年（平成18年）に太田町長が植栽された与謝野町の木である椿を見学。その後は、アウエル氏によるミニバスの運転でおよそ800年前の城「イ・ベリー城跡」、マカントリッヒ（Machynlleth）の水曜市を見学し現地で販売されているものを勉強しました。



(2006 年に太田町長が植栽された椿の前にて)



(イ・ベリー城跡)



(マカントリッヒ (Machynlleth) 水曜市)

11月8日(木) 天候：曇のち雨

午前中にプライマリースクールを見学。児童会によるポピーの劇を鑑賞した後、児童会の案内で学校を見学しました。その後、ペンウエディグスクールの授業風景を見学し、食堂で昼食をとりました。午後は、ペングレイススクールに移動して、校長先生から制服のプレゼントを頂くサプライズがありました。

夜は、ポピーのチャリティーコンサートのチケットを取っていただいております、アベリスツイス大学講堂でコンサートを楽しむことができました。



(プライマリースクールを見学)



(ペンウエディグスクールでの交流)



(夜：アベリスツイス大学 ポピーのチャリティーコンサート)

11月8日（金） 天候：雨

午前中は、アベリスツイス大学隣の国立博物館（ナショナルライブラリー）を訪問。主に芸術と自然科学の分野を幅広く扱う大規模な博物館で、ウェールズの発展を旅するコーナーでは、氷河期の生物を見ることができます。普段入ることのできない場所にも入れていただき、貴重な絵画などを見せていただきました。

午後からは、アベリスツイスの歴史を知ることができるセレディジョンミュージアムを見学した後、旧加悦町時代に植栽された旧タウンホール前の桜を見学しました。桜は、20年前に比べると大きくなっており、交流の歴史を桜からも感じることができました。

また、夜には友好協会主催による歓迎会が、私と岡部氏の滞在しているパークロジホテルで開催されました。歓迎会では、アベリスツイス町長から歓迎のあいさつを受け、与謝野町長から預かりましたあいさつを代読させていただきました。その後、高校生が自己紹介と余興を行いました。余興では、参加者全員に日本にまつわる問題を出すクイズでレセプションを盛り上げてくれました。また、日本のお菓子や紙風船などのお土産を持参してきており、日本の食や文化を通して交流がますます深まることとなりました。



（ナショナルライブラリー）



（旧タウンホール 現図書館）



（旧タウンホール前の桜）

歓迎レセプション



11月9日（土） 天候：曇

高校生は、それぞれのホストファミリーと一緒に過ごしました。私と岡部氏は、キャロライン・ジェイク両氏の案内で、アベリスツイスの町をゆっくりと見学することができました。また、2003年（平成15）に与謝野町に来訪したマイケル氏も呼んでいただいております、訪問OBとの交流もすることができました。

夜、キャロライン・ジェイク両氏の自宅に招待していただき、そこでウェールズの歴史なども詳しく聞くことができました。



（アベリスツイスの全景）



（アベリスツイスの海岸）



（アベリスツイス駅）



（英語とウェールズ語が併記されている）

11月10日（日） 天候：曇

11月10日は、第1次世界大戦の終戦日で、終戦記念日として追悼記念式典（一般的にはポピーと呼ばれている）がイギリス全土の市町村で実施されることを聞き、訪問団全員でアベリスツイスのポピー式典に参加しました。これまでの訪問を通して初めの参加となります。

記念式典の前には、退役軍人、軍の学生、遺族、行政関係者などが旧タウンホール前からアベリスツイス城跡内にある記念碑までパレードし、式典では造花を供えました。

また、式典終了後に現地の地元紙からの取材を受けました。日本で戦争捕虜として過ごした故フランク・エバンツ氏がアベリスツイスと与謝野町の交流の懸け橋となり、この交流が20年間続いている旨の記事が後日掲載されました。私は、この記事がウェールズの多く方にこの交流を知ってもらう機会となり大変意義があったのではないかと感じていま

す。

追悼式典参加後に、故フランク エバンツ氏の墓にお参りました。エバンツ氏の墓は、アベリスツイスから車で約10分北に向かったタリボン村内にあり、高校生全員とホストファミリー、アウエル氏を始め協会役員の約30名でお参りをしました。エバンツ氏のおかげでアベリスツイスに交流訪問できることなどの感謝の気持ちを込めて、高校生全員によるウェールズ語で「デヨホンバウ（日本語訳：ありがとう）」とお礼を言った後、墓石に献花しました。



(ダイラン町長とパレード前の記念撮影)



(町をパレード)

(記念碑の前にて地元紙への掲載)



(エバンツ氏のお墓参り)



(エバンツ氏の墓標と)



(故エバンツ氏 1993年撮影)

11月11日（月） 天候：雨

スクールが休みのため、高校生はホームステイ先の高校生と交流を行いました。私と通訳の岡部氏はアベリスツイス大学を訪れました。私が農林行政に携わっていることから、アウエル氏の計らいにより、アベリスツイス大学獣医学専門のマイケル先生を紹介して頂き、アベリスツイス大学が研究している畜産について教えていただきました。マイケル先生は、10年ほど前に茨城県筑波市内の農林水産省の研究機関に留学されていた経歴があり日本語も堪能で、研究内容について理解を深めることができました。なお、アベリスツイスなどイギリスでは多雨のため、穀物や野菜などの生産が困難で、畜産（酪農や綿羊など）と主となっているとのことでした。

11月12日（火） 天候：曇

午前7時30分発の列車でアベリスツイスを離れることとなっており、午前7時にアベリスツイス駅に集合しました。あっという間の滞在に、アベリスツイスを離れる寂しさと感謝の気持ちを全員が持っていたと思います。出発までの残り少ない時間の中で、全員がお世話になった感謝の気持ちや再会の約束を伝えて、名残惜しみの出発となりました。

車窓からは、徐々に遠のいていくアベリスツイスの風景や立ち寄った場所を見ることができ、懐かしみながらバーミンガム国際空港駅へ向かいました。



（出発前の記念撮影）

11月13日（水） 14日（木）

予定通りバーミンガム国際空港、ドバイ国際空港を経て関西国際空港に午後4時30分頃に到着。入国手続きを済ませると職員の出迎えがあり、トラブルや高校生が体調を崩すことなく帰国できたことで安堵の気持ちが広がりました。関西空港から与謝野町までのバスの中では思い出話で盛り上がり、午後9時頃に与謝野町に到着して解散となりました。

5 報告会

12月19日（水）に開催された報告会では、多くの傍聴者の前で6名の高校生全員が故フランク エバンツ氏の望んだ若い世代が交流して平和を維持していくことなどの目的や、税金を活用しての派遣であるという意味を理解した上で、アベリスツイスで感じ考えた事、また、お世話になった方への感謝、さらには戦争や平和について考えたことなどを自信を持って伝えることができました。限られた時間の中でしたので、彼女達はもっと伝えたかった事があったのではないかと私自身思い、もうすこし上手くコーディネートできたらと反省しております。そして、訪問で成長した彼女達の姿を見ることができ、ふるさと人づくり事業としても意義ある派遣事業であったのではないかと感じました。

6 最後に

今回派遣された6名の高校生と通訳の岡部氏と過ごした12日間の訪問を通して、若い世代と一緒に経験し、感じる事ができるなどすばらしい時間を過ごすことができました。これもこの事業に携わってこられたすべての方のおかげであり、深く感謝を申し上げます。

派遣された高校生においては今回の派遣事業で終わりとするのではなく、小さな町の小さな交流ではありますが派遣事業の団員として感じ、行動し、経験したことや故フランク エバンツ氏の望んだ若い世代が交流することを目的とした事業が与謝野町にあるということも多くの方に伝えながら、これからの人生を生きていって欲しいと願っています。

旧加悦町がアベリスツイスへ贈った桜も20年以上が経過して大きくなり、太田町長が2006年に植栽された樺も年々成長しております。両樹木が成長するように両町の交流の幹もますます力強く大きくなっていることを現地で実感しました。

また、両町の高校生派遣事業も20年が経過して、与謝野町からの派遣も10回目となり、両町で派遣された高校生が100名を超え、私の様に高校時代に派遣されたものが、引率者で再び派遣されるなどセカンドステージを迎えたのではないかと感じております。

これからもますますこの交流事業に関わる方が増え、両町の交流がますます発展することを願うとともに、私も一緒に今後も応援していきたいと思っております。

最後に、アベリスツイスではアウエル会長をはじめ、アベリスツイスの役員の方々には、現地でのプログラムの作成から、視察先である北ウェールズへの運転、また私たち随行者の送迎など大変お世話になったことに対しお礼申し上げたいと思います。

また、故フランク エバンツ氏が築かれたこの交流の懸け橋に対し改めて深く感謝を申し上げます。デヨホンバウ（日本語訳：ありがとうございました）



(1993 年)



(2012 年)



(大江山グランド内の記念碑・・・ポピーの日に預かってきた造花を献花しました)